

機関番号：12611

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008 ～ 2010

課題番号：20520569

研究課題名（和文） 中世奈良における商人・職人の基礎的研究

研究課題名（英文） A basic study on merchants and craftsmen in mediaeval Nara town

研究代表者 安田 次郎（YASUDA TSUGUO）

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・教授

研究者番号：60126191

研究成果の概要（和文）：諸種の史料から奈良や興福寺に関係した商人・職人をかなり網羅的に収集することができ、今後の研究のために貴重な基礎資料を得た。その過程で、福智院家文書中の袋綴じ冊子を解体し、多くの紙背文書を「発掘」して解読した。これらの史料は、本研究のためだけではなく、今後長く日本中世史の解明に有益なものである。さらに、商人・職人と寺社との互酬性的なつながり、門跡の構成員としての側面、室町期の荘園支配のなかでの役割などについていくつかの知見を得た。

研究成果の概要（英文）：The main purpose of this study is to establish a solid foundation for further research on merchants and craftsmen in mediaeval Nara town. First, we have picked up as many merchants and craftsmen as possible from *monjo* (文書 documents) and *kiroku* (記録 records). Secondly, we have collected many *shihai-monjo* (紙背文書 documents once done away with but later their reverse side utilized) from *Fukuchiin-ke Monjo* (福智院家文書 Documents of *Fukuchiin* Family) which will be useful in researches hereafter. Thirdly, we have reached the idea that merchants and craftsmen are reciprocally connected with the temples and shrines, and are organized as a part of their ruling system which still kept its power over the provincial *shoen* (荘園 manor) in *Muromachi* Period (室町時代).

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：奈良、寺院、商人、職人、紙背文書

1. 研究開始当初の背景

(1) 中世の都市民の存在形態や活動は、史料制的な制約もあって、十分に解明されていない。奈良の場合、住民の多くは興福寺、春日社、東大寺などと従属関係を持っていた。商人や職人もまた寺社支配下の座組織に所属することが多い。しかし、商人・職人らの行動範囲は広い。彼らの顧客や生産拠点は、奈良以外の地、たとえば京都や堺などにも存在す

る。したがって、奈良の寺社への従属度は必ずしも高くないと思われる。京都の貴族、武士、寺社との関係があったことも想定しなければならない。奈良の寺社に専従しているわけではなく、比較的ゆるやかな従属関係にあった商人・職人の広い活動のあとを具体的に明らかにする必要があると考えられた。

(2) 研究代表者の安田は、かつて『中世の奈

良』(吉川弘文館、1998)のなかで「地下の堂」を中心に奈良の住民結合について考察したが、そこでは都市民を「郷民」として集団的に見ており、個々の住民の個性に対する追究は十分ではなかった。

(3) その後、安田および研究分担者たちは、科研「興福寺旧蔵史料の所在調査・目録作成および研究」(研究代表者・上島享京都府立大学准教授、平成10-13年度)に参加し、奈良の研究には欠かすことができない興福寺の史料について、多くのことを学んだ。とくに福智院家文書の研究は多くの知見をもたらしたが、その後同文書中の袋綴じ本を解体することによって、紙背文書という形で多くの新史料を得ることができた。その紙背文書の内容の多様性がひとつの大きなヒントとなり、本研究の着想となった。

2. 研究の目的

中世都市奈良の商人と職人を中心に、都市民の存在形態や活動と、寺院との関係を具体的に解明すること。

(1) 寺社と商人・職人との多様な関係の解明。寺社一座という組織的、集団的な関係に加えて、個々の商人・職人との個性的な結合を重視する。

(2) 寺社に従属する商人・職人と、必ずしも寺社に従属しない他の都市民との関係を解明。同じ郷に属する郷民として、あるいは同業者としてどのような関係を構築していたのかなどを解明する。

(3) 「埋蔵史料(紙背文書)」の「発掘」本研究のためだけでなく、今後の寺社研究、中世都市奈良研究のためにもできるだけ多くの紙背文書を収集し、解説・研究して正確な翻刻を作成する。

3. 研究の方法

(1) 先行研究を収集、検討する。

(2) 『大乘院寺社雑事記』『三箇院家抄』などからあらためて徹底的に商人、職人を拾い出す。

(3) 福智院家文書、とくにその紙背文書から商人、職人を洗い出す。

①紙背文書を収集・整理する。

②それらの解説を試みる。

③解説成果を持ち寄り、相互に検討・修正し、読みを確定させていく。

(4) 「互酬性」という観点から、商人・職

人と寺社との関係を捉え直す。

(5) 商人・職人を構成員と捉えて寺院組織を再検討する。

(6) 商人・職人を中心に、都市民のヨコの関係を具体的にあぶりだす。

4. 研究成果

(1) 研究のおもな成果

① 『大乘院寺社雑事記』『三箇院家抄』『経覚私要鈔』などの既刊史料、国立公文書館、お茶の水図書館成實堂文庫、広島大学などが所蔵する未刊史料から多くの商人・職人を拾い出すことができた。これによって中世都市奈良の商人・職人がかなり網羅できたと思われる。また、先行研究の主張のいくつかを再検討する足がかりが得られた。

② 福智院家文書中の袋綴じ冊子を解体し、多くの紙背文書を収集することができた。それらの多くは書状で、極端な崩し字で書かれているので解説にかなりの時間と労力を要したが、研究代表者と分担者が合同で数回にわたって検討を加えることによって読みを確定させることができた。その成果の一部については、近々学界に提供できる見通しである。

③ 福智院家文書について、その料紙の紙質調査を行い、多くの知見を得た。中世の史料については、モノとしての研究も進展しており、今回の成果は、たとえば京都の東寺百合文書などと奈良の史料の材質を比較検討する可能性も示した。

④ 春日社の旧社家である大東家所蔵史料(中近世の史料が中心)について調査を行い、多くの知見を得た。従来知られていなかった記録や文書を確認し、写本のみで知られていた社家の記録の原本(たとえば師淳記)についても現存を確認した。

さらに春日大社所蔵の大東家文書(数年前に大東家から春日大社に寄贈されたもの)について焼き付けを作成し、研究を行って多くの知見を得た。

⑤ 職人らが年末年始に寺社の領主のもとに持参する「替物」、寺社が職人らを動員したときに支給した「酒直」「間水」「御丁間水」「間食」などの検討を通じて、たんに従属関係と割り切るだけでは捉えることができない両者の「互酬性」的な側面について考える手がかりを得た。

⑥ 興福寺大乘院関係の史料にみえる「商人名主」の役割を解明する手がかりを得た。ま

た、奈良の商人らが門跡によって「定使」「御童子」などとして門跡の支配機構の中に取り込まれている場合があることを確認し、中世後期における荘園領主の支配組織や、室町期および戦国期の荘園制を再検討するための手がかりを得た。

⑦ 奈良の商人・職人と奈良以外の、たとえば京都の公家や武士、さらには地方の武士などとのつながりをいくつか確認することができた。このような関係が存在することの確認は、先述の室町・戦国期における荘園制の問題を今後考えていくうえで重要である。

(2) 国内外における位置づけとインパクト

① 興福寺研究における位置づけとインパクト

一時活況を呈した興福寺の研究も最近では停滞気味である。これは、興福寺領荘園や門跡などに関する、従来からの視点による研究が一段落したこと、新しい史料開拓がみられないことなどによる。本研究は、奈良の商人・職人と奈良以外の勢力との結びつきの検出と同時に、商人・職人らの門跡職員としての側面を解明することなどをめざした。ひと言で言えば、商人・職人の活動をトータルとして捉えたいということである。このような興福寺をより広い舞台に置いて広角でみる視点が興福寺研究を再生することにつながると考える。

史料の開拓に関していえば、袋綴じの冊子などの紙背に眠る「埋蔵史料」の「発掘」、解読は大いに意味があり、研究テーマを異にする研究者にも役立つ作業であったと思う。

② 中世都市としての奈良の研究における位置づけとインパクト

中世都市としての奈良の研究も一時ほどの元気はない。最近では新しい成果はもっぱら考古学の世界からで、それに対する文献側からの反応は鈍い。都市の中核である商人・職人の多様な側面の解明をめざした本研究は、中世都市奈良をもういちど見直す契機となりうると考える。

「発掘」した「埋蔵史料」のなかにも、都市の研究に活かせるものが多数あると考えている。

③ 室町期荘園制の研究における位置づけとインパクト

興福寺の所領荘園の多くは膝下の大和国にある。しかし、たとえば越前国の河口・坪江荘のように、地方にも重要な荘園は少なくない。それらの荘園は、室町期においても比較的良好に支配や年貢収取が行われていたが、それを担ったのが地方の武士と商人たちと想定される。商人に焦点を置いた本研究は、

室町期荘園制の研究の進展にも寄与できるものである。

④ 紙背文書の収集・研究における位置づけとインパクト

かつて福智院家文書は、花園大学福智院家文書研究会によって活字にされた一部のものだけが利用できるにすぎなかった。その後、いくつかの大学で福智院家史料をほぼ網羅した写真版を備えるようになったが、紙背文書は見るすべがなかった。また見られたとしても、解読するのは容易ではなかった。本研究で多くの紙背文書を収集し、解読できたことは、福智院家文書や興福寺の研究のみならず、ひろく日本中世史の研究に寄与するものである。

(3) 今後の展望

今回奈良の商人・職人を追跡して浮かび上がったことのひとつは、彼らが興福寺を舞台として、さまざま方面（人びと）と結びついているということである。詳しくは別の機会に委ねざるを得ないが、興福寺のような巨大寺院は、貴族、武士、都市民、荘民などさまざまな人びとが出会い、さまざまな関係を取り結ぶ場でもある。たとえば、同寺の室町期の地方荘園は、たんに守護などの在地有力武士に委ねられているというのではなく、朝廷の貴族や幕府の武士、地方の武士、興福寺の僧、京都と奈良と地方とを結ぶ商人などが複雑に絡み合うなかでその支配が維持されているように考えられる。中世後期においては、寺院社会を貴族社会や武士社会とならぶ第三の社会として独立的、並立的に考えるより、むしろ貴族、武士、在地などの諸社会のさまざまな勢力が出会い、さまざまな関係を取り結ぶ場、中世の諸勢力が出会い、協調・共同が模索され試みられる場として見直したほうが面白いのではなからうか。

したがって、つぎの課題は、貴族、武士、庶民など、さまざまな集団や勢力が出会い、新しい関係を作ってゆく場として寺院社会を見直すこと、寺院社会の「人のつながり」を解明していくことである。

〔雑誌論文〕（計5件）

① 末柄豊、足利義種の源氏長者就任、日本歴史 748、査読あり、pp87～95、2010

② 末柄豊、畠山義総と三条西実隆・公条父子—紙背文書から探る—、加能史料研究 22、査読なし、pp1～27、2010

③ 安田次郎、室町殿の南都下向、文学 11-1、査読なし、pp43～57、2010

④ 前川祐一郎、中世後期における集団間紛争の解決における「罪科の成敗」、史学雑誌 119-3、査読あり、pp36～59、2010

⑤末柄豊、『不問物語』をめぐって、年報三
田中世史学 15、査読なし、pp1～37、2008

〔図書〕(計4件)

①安田次郎、寺社と芸能の中世、山川出版社、
99頁、2009

②末柄豊、『古文書の諸相』慶応大・文、pp115
～143、2008

③前川祐一郎、法が生まれるとき、創文社、
pp179～206、2008

④安田次郎、日本の歴史 南北朝・室町時代
走る悪党・蜂起する土民、小学館、366頁、
2008

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安田 次郎 (YASUDA TSUGUO)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学
研究科・教授

研究者番号：60126191

(2) 研究分担者

末柄 豊 (SUEGARA YUTAKA)

東京大学・史料編纂所・准教授

研究者番号：70251478

前川 祐一郎(MAEGAWA YUICHIRO)

東京大学・史料編纂所・助教

研究者番号：00292798

(3) 連携研究者

上島 享 (UEJIMA SUSUMU)

京都府立大学・文学部・准教授

研究者番号：60285244